

幼保小の接続を意識した多面的取組について

はじめに

小一プロブレム解消を目指した幼保小のスムーズな接続や校種間の連携をどう進めるべきかを、本校の重点課題として取り組んできた。また、この研究を進めるに当たり、札幌市教育委員会、幼児教育センターより本年度研究実践の指定を受け、様々な面でサポートしていただきながら研究を進めることができた。まだ、実践半ばでの経過報告となるが、本校の取組を以下に示す。



1. 幼保小連携をなぜ行うのか

地域に位置する校種間の交流の必要性は何か。

- ①幼保小のスムーズな接続
- ②幼児及び児童の成長を実感する教育活動としての交流推進
- ③幼保を含めた地域社会へ学校の教育活動の紹介
- ④地域住民のつながり強化

この4点を意識して、本校では交流を推進してきた。

- ①がこの事業の主目的であり、新入学児童が学校に希望と夢を抱き、学校は楽しいところで、行ってみたいと強く思ってもらえるようにすることである。そして、その後は学校のスタートカリキュラムへとつなげていくことになる。
- ②については、主に低学年が自分たちの成長を実感するために、先輩として、新しく入ってくる新一年生を迎える活動である。
- ③については、学校は、地域の文化的発信基地としての役割をもつと考えるならば、広く教育や育児に関し、講演会や学習会等を通して学校に来てもらい情報を提供す



る。この場合、地域社会と言っても広すぎるため、本校では、幼稚園や保育園に子どもを通わせている保護者に向けて発信することが効率がよいと考える。学校の様子や PTA 活動を早くから知ってもらう事が新入学児童の保護者の学校に対する不安感を払拭することにつながり、それが新入学児童の不安払拭につながっていくものと考えている。

④に関しては③とも連動するが、学校・幼稚園・保育園が結びつきながら、地域の一人として地域発展に寄与するためのきっかけに幼保小連携があれば良いと考えている。

2. 目的に合わせて何をしたのか

以下に具体的な活動とその目的について示す。

| |
|---|
| ①幼保小のスムーズな接続のため (主に入学前の子どもたちに学校の様子を知ってもらう活動) |
| A 1年生との交流 B 学校見学会 C 学習発表会見学 D 特別参観日 E 図書館読み聞かせ見学 F 学校で遊ぼう G 就学時健診 H 入学説明会 |
| ②児童の成長を共有する教育活動としての交流推進 |
| A 幼稚園のみんなと一年生の交流 I 1日入学 |
| ③幼保を含めた地域社会へ学校の教育活動の紹介 |
| J 親父の会夜間見学会 K 地域講演会 D 特別参観日 L 土曜地域公開日 |
| ④地域住民のつながり強化 |
| K 地域講演会 M 青少年健全育成講演会 J 親父の会夜間見学会 N 発Pひろば |

3. 越えねばならないハードル

このように素晴らしい事業ではあるが、幼保小連携を進めていくためには、いくつかのハードルを越えなければならない。

①幼保小に関わる教育課程の編成

単に幼稚園や保育園の園児を学校に連れて来たらそれで連携事業が成り立つ訳ではない。学校内においては、幼保小連携の推進を計画実行する外部連携委員会の提案からスタートする。そして、これらの計画を遂行するために各分野の協力を得ることになる。1年生の成長のために必要な学びとして教育課程に位置付けて行く。本校では生活科の中で、幼稚園児と遊ぶ会と1日入学で新しい1年生と関わる時間をもっている。もう少し増やしていきたいと考えているが、時数や年間計画に照らし合わせると増やすのは容易ではない。



次年度は、他校で実践されているが、5年生と関わることで6年生になったときの関わりが単なる単発の関わりから、計画的、見通しをもった活動となるという点においては有効である。是非とも次年度は取り入れていきたいと考えている。しかし、5年生はもっとも時数の確保が厳しく、取り組む内容が多い。新たな活動を開拓するにはそれだけの成長が要求される。良いことだ

が、簡単に踏み切れないジレンマがあり、高いハードルである。しかし、5年生は、廊下や多目的室で遊ぶ園児の様子や1日入学に来る子どもたちを温かく見つめている。来年度自分たちと多く関わることを意識している様子である。教師の都合だけでなく子どもの意識を大切にしたいと強く思う。



②受け入れる学校側の意識

幼保小の連携に積極的なある小学校長が次のように言っていたのを聞いたことがある。「下位の校種を軽く見て疎んじる傾向が日本の教育界にある。この意識を取り除かなければ真の連携は難しい。」小学校は幼稚園を、中学校は小学校を、高等学校は中学校を、をという事なのだと思う。どこかに、「幼稚園や保育園とそんなに頑張って連携しなくてもいい」「1年生だけが行えばいい」という考えが有るのは正直な感想だと思う。しかし、連携無しにスムーズな接続はなく、それが学校に入ってから低学年の問題となるのなら本腰を入れて考えなければならないことだと思う。学校全体で意識化して、組織化して取り組む必要を感じる。このハードルは高いが学校現場として真剣に考える必要がある。



③連携する関係機関との調整

今年度の幼保小の連携には、開放図書館のバックアップが大変大きかった。単に、「学校に来てください。生の普段の学校を自由に見に来てください。」と訴えたところで、それほど興味は引かないと思う。何か引きつけるイベントが必要である。そう考えるとどことタイアップして事業を進めるのかと

いうことが大変重要になってくる。学校の強みを活かした連携ができれば心強い。本校では、開放図書館が校内、地域へ向けて広く発信し、子どもたちにも大人気である。この開放図書館と手を取り合って、互いの事業推進・強化のために協力し合った。以下のような互いの思いが一致したため推進することが可能となった。

【図書館との協力関係】

| | 強み | 願い 推進事項 |
|-----------|-------------------------------|------------------------------|
| 幼保小連携〈学校〉 | 多くの園と関係をもっている。 事業計画をもっている。 | 多くの園児や保護者を学校に呼んで交流したい。 |
| 開放図書館 | 読み聞かせ、大型紙芝居、図書関係の人材がある。 | 広く地域に存在を伝え、ボランティア等の人材育成をしたい。 |

4. 連携の実際

(1) 園児が学校にスムーズに接続できることをねらった実践

①学校で遊ぼう・学校探検・学校見学

小学校とはどんなところなのか、探検をしたり、広いグラウンドや前庭、噴水、動物を見たりしてまず学校を知ってもらい、楽しいところだという期待感をもってもらう事が大切である。幼稚園や保育園には、いつでも気軽に遊びに来て学校の施設を使って欲しいと伝えている。



学校のスキー山で楽しい雪遊び



学校探検・見学





学習発表会の見学



就学時健診の様子

②特別参観日

幼稚園児、保育園児、その保護者だけを対象にした参観日を設定した。この日には本校の保護者は参観できない。行事程度しか見ることができない園児の保護者にとってどんな学習や行事が展開されているのか、学校の施設はどうなっているのかを見る貴重な時間である。午前の時間帯にいつ来ても、いつ帰っても構わないというゆるやかさの中で、多くの人に学校を見てもらおうという企画である。1年目の今年は宣伝効果が弱く、期待した人数は集まらなかったが、授業や開放図書館の催し、ミニ児童会館などの施設を興味深く見ていた。





学校行事のDVDを観たり、施設を見学したりする保護者。

(2) 1年生児童との交流

教育課程に位置付いた活動の一つで、一年生が成長した自分たちを確認するため、来年入学する園児との交流会を企画したものである。1日入学の時の交流と、生活科で企画した交流の二つを本校では実践している。生き生きと楽しそうに園児のお世話をしている姿がかわい。



一年生がお兄さんお姉さんとなって、園児と一緒に活動する。

(3) 地域とのつながり、学校とのつながりを見据えた連携



発Pひろば



P T A親父の会主催夜間見学会

地域社会と学校とのつながりという視点から見た幼保小連携には、開放図書館が保護者、地域向けの講演会や読み聞かせ会がある。多くはなかったが、地域の人が入学前の子どもを連れて参加していた。開放図書館は、託児コーナーを設けて話が聞きやすいように配慮してくれた。園児の保護者が将来、開放図書館ボランティアやP T A役員など学校の活動に積極的に関わってくれたり、学校の様子を理解してくれたりするには、入学前から学校に触れていることは大きい。本校では、地域講演会、読み聞かせ、P T Aのお祭りである、



開放図書館読み聞かせ

「発Pひろば」「地域公開学習会」「P T A親父の会の夜間学校紹介」などを通して、入学前の園児やその保護者と関わりをもつようにしている。

開放図書館講演会託児所



終わりに

1年間にわたり、幼保小の連携事業を展開してきたが、次年度は今年度の課題を踏まえつつ、幼稚園、保育園との絆を深め、市教委をはじめ関係団体のご指導のもと、連携事業をより一層充実させていきたいと考えている。